

聖書ギリシア語とゴート語の対照研究
 (1) —— 迂言的未來表現について

鴨瀬昌幸

§ 0

古典ギリシア語において未來を表す言語形式としては、動詞語幹に未來屈折接尾辞を付加する屈折形態論的な形式があるが、これに加えて、「μέλλω + 不定詞」や、「εἶμιの未來時制 + 不定詞」等の迂言的表現による形式もあった。これらの迂言的構文は、コイナー——新約聖書ギリシア語——において発達し、現代ギリシア語においては前記の屈折形態論的な表現形式を駆逐するに至った。神田²¹⁾では、次のように述べている(44頁)。

「又既に述べた通り(§ 37参照)、新約では現在時称や μέλλειν と不定法(現在又はアオリスト)の形式が未來を表わす為に用いられた結果、未來時称形の用法は衰退しており、現代ギリシア語では全く失われてしまった。」

本稿では、新約聖書ギリシア語におけるこれらの迂言的未來表現の内、特に「μέλλω + 不定詞」構文に焦点をあて、これがゴート語でどのように翻訳されているかを検討する。まず、§ 1 ではギリシア語の「μέλλω + 不定詞」構文についての諸学者の見解を検討する。§ 2 ではゴート語における未來表現の諸形式に関する諸学者の見解を検討し、考察を加える。§ 3 では、新約聖書ギリシア語の「μέλλω + 不定詞」構文がゴート語でどのように翻訳されているかを実例に即して検討し、考察を加える。但し、紙面の都合上、本稿と次稿の2回に分けて掲載させていただくことを予めお断わりしておく。

ここで、本稿中に引用した聖書本文について述べておく。ギリシア語本文は、Nestle-Alland版²²⁾を使用した。また、ゴート語本文についてはStreitberg²³⁾を使用した(彼のギリシア語本文は参照しなかった)。さらに、日本語訳については、「聖書共同訳」を参照した。なお、グロスの訳語は、岩隈²⁴⁾に準拠した。

ここで、聖書ギリシア語の「μέλλω + 不定詞」構文に関する諸学者の見解を見てみよう。

聖書ギリシア語の「μέλλω + 不定詞」構文について、神田は先に引用したように、特に屈折形態論的な未来時制との相違については述べていないが、Blass⁶⁾及びNunn⁶⁾に次のような記述がある。

まず、Blassは次のようにべている（156頁）。

「μέλλειν + 不定法は、（未来時制のように）間近に迫っていることを表現する；このことは、古典語でも無い訳ではないこの言い替えは、過去において間近に迫っていることが示され得るという特徴を示している。

さらに接続法が形成され得る。そして、それは徐々になくなる不定未来形（不定法及び分詞）の代用品である。それ故に、この場合にもその言い替えは大抵用いられている。」

この記述からは、この構文が未完了相を示していることが窺える。

ところが、Nunnは、次のように述べている（80頁）。

「μέλλειν + 不定詞もまた直説法未来に類似した効力で用いられる。この表現は普通、（何物かが）しようとしている行為や、起こるのが確かな行為を示す。」

この記述からは、「μέλλω + 不定詞」構文は（単なる未来時制ではなく、）未完了相に加えてある種のムードを示しているのではないかと思われる。

両者の記述で一致している点は、この迂言的構文が未完了相を呈していることであるが、これは後ほど実例に即して検討される。

ゴート語には、聖書ギリシア語のような屈折形態論的な方法による未来時制はなかったので、未来を表現するための種々の方法がある。それらについて、諸学者の見解は大筋では一致しているものの、部分的に異なっている。

まず、Wright⁷⁾は次のように述べている（190頁）。

「単純未来は一般的に現在によって表現される。――（中略）――未来は、不定詞と共に skulan, haban, duginnanの現在時制によっても表現されることも時々ある。」

この記述からは迂言的構文の性格は明らかにされないが、それでも、それ

らの構文と単純未来とは性格が異なることが暗示されているように思える。
また、Mossé¹⁰⁾は次のように述べている(168-169頁)。

「ゴート語は、未来のための諸形式を持っていない。それを示すために、いくつかの方法に頼っている：

1. 継続的、あるいは不確定な行為が問題となるとき、それ(ゴート語)が使用するのは：

a) なによりもまず現在形：b) 希求法現在：c) duginnan, haban, skulan, munan及び不定詞による迂言的構文

2. 確定的な行為が問題となるとき、完了相あるいは動詞の点の相のとき、動詞接頭辞 ga-のついた動詞の現在が非常にしばしば未来を現す」この記述では、迂言的構文は未完了相の下位範ちゅうである継続相を示していることになる。

さらに、千種¹¹⁾は次のように述べている(44頁)。

「時制としての未来は存在せず、大抵は直説法現在(特に完了的接頭辞 ga を伴う動詞の現在)によって代用されるが、未完了的(ないし接続的)未来は、動詞 haban「持っている」、duginnan「始める」、skulan「しなければならぬ」の現在形と不定詞の結合によって表現されることがある。」

ここでは、未来を表す迂言的構文は未完了相を示しているらしいことを述べるに留まっている。

なお、Braune/Ebbinghaus¹²⁾には関連した記述はない。

§ 3

では、この「μέλλω + 不定詞」構文はゴート語ではどのように訳出されているのであろうか。

μέλλωは新約聖書では109回用いられている。そして、聖書の中で「μέλλω + 不定詞」構文が用いられているのは92回である。また、μέλλωの出現箇所をゴート語と対照できるのは26箇所である。その中で、「μέλλω + 不定詞」構文とゴート語の表現を対照できる部分は全部で21箇所である。よって、本稿ではこの21例をまず検討しなければならない。

ところが、ゴート語において、ギリシア語の「μέλλω + 不定詞」構文が一樣に訳出されているわけではない。

次頁に、その訳し分けの実態を表にしたものを掲げる。

聖書ギリシア語：「μελλω+不定詞」		
対応するゴート語の表現	個数	箇所
skulan+ 不定詞	10	Mt. 11-14, Lc. 9-31, Lc. 9-44, Lc. 19-11, Jh. 7-35, Jh. 7-35, Jh. 7-39, Jh. 12-33, Jh. 18-32, 2Tm. 4-1
munan+ 不定詞	4	Lc. 10-1, Lc. 19-4, Jh. 6-15, Jh. 14-22
haban+ 不定詞	3	Mc. 10-32, Jh. 6-6, Jh. 6-71
anawairþs wisan+ 不定詞	2	1Tm. 3-4, 1Tm. 1-16
skauftjan sik+ 不定詞	1	Jh. 12-4
wisan+ 形容詞	1	Lc. 7-2

はたしてこれらの訳し分けに原理は存在するのか、存在するとすればそれは如何なる物なのかを追求するために、ゴート語の表現別に用例を検討してみたい。本稿では、まず各表現別に実例を挙げ、後にその例に考察を加えていくという方式を採用することにする。実例は、まずギリシア語本文を挙げ、次に対応するゴート語の本文を挙げる。参考のため、日本語訳を掲げるが、これはギリシア語やゴート語の直訳ではないことをお断りしておく。なお、グロスは狂言的構文に関連した箇所のみにつけ、該当する日本語訳の部分には下線をひいてある。

A. skulan+ 不定詞

例文 1 Mt. 11-14

καὶ εἰ θέλετε δεῖσθαι, αὐτός ἐστιν Ἡλίας ὁ μέλλων ἔρχεσθαι.
μέλλω ἔρχομαι
現分能単男主 不中未来
来る

jah jabai wildedeiḅ miḅniman, sa ist Helias, saei skulda qiman.
skulan qiman
直過3単 不
来る

あなたがたが認めようとするれば分かることだが、実は、彼は現れるはずの
エリヤである。

例文 2 Lc. 9-31

οἱ δὲ φθίντες ἐν ὁδῷ ἐλεγον τὴν ἔξοδον αὐτοῦ, ἣν ἤμελλον
μέλλω
直能未過3単

πληροῦν ἐν Ἱερουσαλήμ.
πληρῶ
能現不
遂げる

ḅai gasaihanans in wulḅau qeḅun urruns is, ḅoei skulda usfulljan
skulan usfulljan
直能過3単 不
成就する

in Iairusalem.

二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる
最期について話していた。

例文 3 Lc. 9-44

θέυθε ὑμεῖς εἰς τὰ ᾧτα ὑμῶν τοὺς λόγους τούτους· ὁ γὰρ υἱὸς τοῦ
ἀνθρώπου μέλλει παραδίδοσθαι εἰς χεῖρας ἀνθρώπων.

μέλλω παραδίδομι

直能現3單 不受現
引き渡す

lagjib jus in ausona izwara bo waurda, unte sunus mans skulds
skulan

過分

Ist atgiban in handuns manne.

wisan atgiban

直現3單 不
与える

この言葉をよく耳に入れておきなさい。人の子は人々の手に引き渡されよう
としている。

例文4 Lc. 19-11

Ἀκούοντων δὲ αὐτῶν ταῦτα προσθεὶς εἶπεν παραβολὴν διὰ τὸ ἔγγυς
εἶναι Ἱερουσαλὴμ αὐτὸν καὶ δοκεῖν αὐτοῦς ὅτι παραχρῆμα μέλλει ἡ

μέλλω

直能現3單

βασιλεία τοῦ θεοῦ ἀναφανέσθαι.

βασιλεία θεός ἀναφάνω

女単主 男単属 不受現
国 神 現れる

at gahausjandam þan im þata, biaukands qab gajukon, bi þatei neha
Iairusalem was, jah þuhta im ei suns skulda wesi þiudangardi

skulan wesan þiudangardi

直過3單 希過3單 女単主

国

gudis gaswikunþjan.

guþ gaswikunþjan

男单属 不
神 一般に知らせる

人々がこれらのことに聞き入っているとき、イエスは更に一つのたとえを話された。エルサレムに近づいておられ、それに、人々が神の国はすぐにも現れるものと思っていたからである。

例文 5 Jh. 7-35

εἶπον οὖν οἱ Ἰουδαῖοι πρὸς ἑαυτούς· ποῦ οὗτος
μέλλει πορεύεσθαι ὅτι ἡμεῖς οὐχ εὐρήσομεν αὐτόν; μὴ εἰς τὴν
μέλλω πορεύω

直能現 3 单 不受現
行く

διασπορὰν τῶν Ἑλλήνων μέλλει πορεύεσθαι καὶ διδάσκειν τοὺς Ἕλληνας;

paruh qebun bai Iudaleis du sis misso: hadre sa skuli gaggan,
skulan gaggan
希能現 3 单 不
行く

pei wels ni bigitaima ina? nibai in distahein biudo skuli gaggan
jah laisjan biudos?

すると、ユダヤ人たちが互いに言った。「わたしたちが見つめることはないとは、いったい、どこへ行くつもりだろう。ギリシア人の間に離散しているユダヤ人のところへ行って、ギリシア人に教えるともいえるのか。

例文 6 Jh. 7-35

εἶπον οὖν οἱ Ἰουδαῖοι πρὸς ἑαυτούς· ποῦ οὗτος μέλλει πορεύεσθαι ὅτι
ἡμεῖς οὐχ εὐρήσομεν αὐτόν; μὴ εἰς τὴν διασπορὰν τῶν Ἑλλήνων μέλλει
μέλλω

直能現 3 单

πορεύεσθαι καὶ διδάσκειν τοὺς Ἕλληνας;
πορεύω διδάσκω

降っていなかったからである。

例文 8 Jh. 12-33

τοῦτο δὲ ἔλεγεν σημαίνων ποῖω θανάτῳ ἤμελλεν	ἀποθνήσκειν.
μέλλω	ἀποθνήσκω
直能未過3単	能現不
	死ぬ
batuβ-βan qab bandwjands hileikamma dauβau skulda	gadauβnan.
skulan	gadauβnan
直能過3単	不
	死んでしまう

イエスは、御自分がどのような死を逃げるかを示そうとして、こう言われたのである。

例文 9 Jh. 18-32

Ἦνα ὁ λόγος τοῦ Ἰησοῦ πληρωθῆ δὲν εἶπεν σημαίνων ποῖω θανάτῳ	
ἤμελλεν	ἀποθνήσκειν.
μέλλω	ἀποθνήσκω
直能未過3単	能現不
	死ぬ

ei waurd fraujsins usfullnodedi, patei qab, bandwjands hileikamma	
dauβau skulda	gaswiltan.
skulan	gaswiltan
直能過3単	不
	死んでしまう

それは、御自分がどのような死を逃げるかを示そうとして、イエスの言われた言葉が実現するためであった。

例文 10 2Tm. 4-1

Διαμαρτύρομαι ἐνώπιον τοῦ θεοῦ καὶ Χριστοῦ Ἰησοῦ τοῦ μέλλοντος
μέλλω

現分能男中单属

κρίνειν ζῶντας καὶ νεκρούς, καὶ τὴν ἐπιφάνειαν αὐτοῦ καὶ τὴν
βασίλειαν κρίνω αὐτοῦ.

不能現

裁く

Weitwodja in andwairþja gudis jah frauþins Xristaus Iesuis, saei
skal stojan qiwans jah dauþans bi qum is jah þiudinassu is:
skulan stojan

直能現3单 不

裁く

神の御前で、そして、生きている者と死んだ者を裁くために来られるキリスト・イエスの御前で、その出現とその御国とを思いつつ、厳かに命じます。

—— 次稿に続く ——

付記

貴重な参考文献を快くお貸し下さった竹島俊之先生に厚く御礼申し上げます。

言主

- 1) Kanda T. (神田盾夫) (1964^o): 『新約聖書ギリシア語入門』東京: 岩波書店
- 2) Nestle-Aland (1979^{2o}): Greek-English New Testament, 26th rev. ed. Stuttgart: Deutsche bibelgesellschaft.
- 3) Streitberg, W. (1971⁷): Die gotische Bibel. Heidelberg: Carl Winter.
- 4) Iwakuma N. (岩隈直) (1979^o): 『新約ギリシヤ語辞典』東京: 山本書店
- 5) Blass, F. (1949^o): Grammatik des neutestamentlichen Griechisch, Bearbeitet von A. Debrunner. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

- 6) Nunn, H. P. V. (1951): A Short Syntax of New Testament Greek, Cambridge, Cambridge Univ. Press.
- 7) Wright, J. (1954²): Grammar of the Gothic language. Oxford at the Clarendon Press.
- 8) Mossé, F. (1942): Manuel de la langue gotique, Paris, Aubier.
- 9) Chigusa S. (千種眞一) (1989): 『ゴート語の聖書』東京: 大学書林
- 10) Braune, W. (1961^{1*}): Gotische Grammatik, neu bearbeitet von E. A. Ebbinghaus. Tübingen: Max Niemeyer.

参 考 文 献

- Blass, F. (1949⁶): Grammatik des neutestamentlichen Griechisch, Bearbeitet von A. Debrunner. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Braune, W. (1961^{1*}): Gotische Grammatik, neu bearbeitet von E. A. Ebbinghaus. Tübingen: Max Niemeyer.
- Chigusa S. (千種眞一) (1989): 『ゴート語の聖書』東京: 大学書林
- Executive Committee of The Common Bible Translation (共同訳聖書実行委員会) (1989): 『聖書 新共同訳』東京: 日本聖書教会
- Inaba M. (稲場満) et al. (1977): 『新約ギリシヤ語逆引辞典』東京: 山本書店
- Institute für neutestamentliche Textforschung und vom Rechenzentrum der Universität Münster (1987³): Konkordanz zum Novum Testamentum Graece von Nestle-Aland, 26. Auflage, und zum Greek New Testament, 3rd Edition. Berlin und New York: Walter de Gruyter.
- Iwakuma N. (岩隈直) (1979⁶): 『新約ギリシヤ語辞典』東京: 山本書店
- Kamose M. (鴨瀬昌幸) (1989): 「聖書ギリシヤ語とゴート語の対照研究に関する一考察」『アロピレア』1号
- Kanda T. (神田盾夫) (1964⁶): 『新約聖書ギリシヤ語入門』東京: 岩波書店
- Mossé, F. (1942): Manuel de la langue gotique, Paris, Aubier.
- Nestle-Aland (1979^{2*}): Greek-English New Testament, 26th rev. ed. Stuttgart: Deutsche bibelgesellschaft.
- Nunn, H. P. V. (1951): A Short Syntax of New Testament Greek, Cambridge, Cambridge Univ. Press.

Smyth, H. W. (1972⁷): Greek Grammar, Rev. by G. M. Messing. Cambridge: Harvard University Press.

Streitberg, W. (1917): Die gotische Bibel. Heidelberg: Carl Winter.

Wright, J. (1954²): Grammar of the Gothic language. Oxford at the Clarendon Press.

(SUMMARY)

A Comparative Study of New Testament Greek and Gothic (1)

—on the Periphrastic Expressions of Future

Kamose Masayuki (鴨瀬昌幸)

In New Testament Greek, there were several ways of periphrastic expressions of future. *μέλλω+infinitive* construction belonged to one of these expressions. This construction seemed to have an imperfect aspect. In Gothic also had several ways of periphrastic expression of future, that seemed to have an imperfect aspect. The *μέλλω+infinitive* construction translated into Gothic in several ways. In this paper, I tried to show whether a principle on the translation existed or not, and if existed, what principle existed there.